

平成 22 年 5 月 17 日（月）西部研究会

「仏教福祉」の語源—仏典中に見られる「福祉」という語はいかに少ないか—

上田 千年（浄土宗総合研究所）

余談になるかもしれないが、日本に於ける「ボランティア」という語は、一般的に「社会貢献」或いは「社会奉仕」の意味で使用されている場合が殆どである。学校教育に於いても総合学習等で社会貢献に関する活動を「ボランティア」と言い換えている事例も数多く見られ「社会貢献」等と「ボランティア」は同義とみても良い（故に日常これら言葉の使用に関して特に混乱も問題もない）。しかし、ある言葉と組み合わせると、その状況には混乱が生じる。例えば「ボランティア精神」という語を提示し説明を求めたらどうなるか。「ボランティア精神」は「社会貢献精神」や「社会奉仕精神」と言い換えられない。この「ボランティア精神」は「ボランティア」本来の意味である「自発性」が優先し、社会貢献に関わる活動のみを意味しなくなるからである（因みに義勇兵〈軍〉も volunteer を用いる）。そこで「ボランティア」を勧めた点に疑問を抱く事となる。本来、自発に重きを置くにも関わらず、発言自体は他律的な社会奉仕の容認となり、結果「ボランティア精神」と遊離していくのではと。

「ボランティア」という語は語義を規定することなく、不明瞭なまま当事者の間で何となく「社会貢献」「社会奉仕」と理解されてきた一般用語といえる。無論、言葉は恣意的には機能しないから、その点に異議を唱えるつもりは毛頭ない。

ただ危惧するのは、それが専門用語として用いられた場合、その語を機軸とした概念把握・論理構築・学術的体系化には困難を生じるのでは？という点だ。

そして同様の危惧が表題の「仏教福祉」にも存在すると考えている。

「仏教福祉」という語は何を示すのか？現在、その疑問点は解決されることなく更なる混迷を続けていると考える。結果、「仏教福祉」という言葉は使用すべきではないという指摘もあり、発表者もこれに賛同したくもある（平成二十二年四月現在、葬祭関連事業をなりわいとする〈仏教福祉会〉という法人名も確認されているし、この語は一般用語としても更なる変化や混乱を生じるだろう）。ただ前述の通り言葉は恣意的に機能しない。ために、この語の使用を一切禁止できるわけではない。ならば「仏教福祉」という語は何時作られ、何時から使用されるようになったのか。更に仏典で「福祉」という語はどのように使用されていたか、それらに関連する問題点を挙げたいと考えた。そして本発表にて以下のように述べた（概要のみ箇条書きにて）。

- ・概念や用語としての明確な位置づけがされぬまま、文献の比較・検討なしに各人が抱く情念のもとで任意に「仏教福祉」なるものを設定し続けている。結果、「仏教福祉」は一般用語に於いても混乱を生じ、専門用語・概念としては全く透徹した論理を持たない。

- ・「仏教社会事業」が「仏教福祉」であるとするのが多くみられる。ただし、その根拠とな

る「仏教社会事業」は戦前期と戦後期の2つに大別できる。戦前期の多くは「仏教社会事業とは何か」という問いよりも「仏教徒はどのように社会事業をなすべきか」という目的で述べているとみるべきで、各人の情念が強く反映している。戦後期のそれは、孝橋正一氏をはじめ「仏教の持つ哲学的思惟」と「社会事業」とを精査し新たに「仏教社会事業とは何か」を問い直すものであった。また、孝橋正一氏の言う「仏教の現代化」は、仏教的思惟に基礎を置く近代社会事業の構築というのがよいかもしい（孝橋正一『社会科学と仏教』、pp. 182-183、創元社、一九六八）。

・しかし、「仏教福祉」はこの何れの性格を継承するものか検討されることもなく、ただ「仏教社会事業」（或いは「仏教社会福祉」も）を「仏教福祉」と言い換えている。それら「仏教徒による社会（福祉）事業」と「仏教的思惟を基礎に置く社会（福祉）事業」も混同したままの「仏教福祉」という語は、「仏教社会事業」「仏教社会福祉」という用語の持つ概念まで壊乱させる可能性を孕む。

・「仏教福祉」という語は、一九六十年代に仏教徒或いは研究者が、時勢や当時の社会からの要請を受けた焦燥か未だ判然としないが、「社会福祉」との早急な結合を希求した故に基本理念や概念定立に関して不十分なまま作り出された語である可能性が高い。

・以上のように、各人の「仏教福祉」に向ける情念の故か「仏教福祉とは何か」という問いが何故か忘れられ、「仏教福祉はどのようになすべきか」のみが先行してきたようにみえる。更に「仏教」という冠さえも、先に述べたように各々が論理よりも情念に重きを置き、任意に設定し続け特に文献との比較・検討しなかったため、語義・概念の混乱を起し、肝腎の「福祉」の語までも不明瞭にしていると考えられる。

以 上